起業プロセスは様々な利害関係の中でどのように行われるか
—情動的側面に着目して—
Relationality among Various Actors and Participants in Entrepreneurial Activities: From the Viewpoint of Emotional Exchanging Forms

北本　遼太 *
Ryota kitamoto
*筑波大学大学院
University of Tsukuba
S1421277@u.tuskuba.ac.jp

Abstract

In this paper, I focused on background that is needed for changing the form of working and capitalistic values, and investigated the process of starting welfare service. I used the Actor Network Theory for describing the process exchanging various things (for example emotionality) between various actors. In result, I described emotional interaction between entrepreneurs and community residents. And I discussed about the form of emotional exchanging between "the most peripheral participant" and entrepreneurs.

Keywords — Entrepreneurial process, Actor Network Theory, Capitalism, Welfare service.

１．問題と目的

1990年代のバブル崩壊以降、従来、自明視されてきた雇用形態である「終身雇用」「年功序列」は、終わりを迎え、その代わりとなる時代状況に即した多様な働き方の可能性を探求することが現代社会における課題である。例えば、城（2006）は、勤務年数に応じた出世を保証する「年功序列制」といった、企業側が用意した「レール」は、企業の資本の拡大が限界を迎えるとともに、崩壊していることを指摘しつつ、転職市場の拡大や、新会社法といった起業に対する行政支援の増加などについて多様な働き方の端緒として紹介している。

このような、多様な働き方の1つとして、自ら事業を立ち上げる「起業」という働き方に注目が集まっている。例えば、山形県鶴岡市在住の女性を対象に、「好きなこと×世の中にいいこと」で小さく起業する「ナリワイ起業」の支援を行う「鶴岡ナリワイプロジェクト」と呼ばれる活動が組織されている(鶴岡ナリワイ女性プロジェクトチーム、2015)。また、教育機関においても、大学発ベンチャーの支援を目的とする筑波大学国際産学連携本部が2014年に設置されており、2016年4月までに累計110社の起業を支援している（筑波大学国際産学連携本部、2016）。このように、起業家の育成・支援を目的とした民間団体や教育機関が設立されていることを考慮すると、既存の組織に所属するのではなく、自ら事業を立ち上げる「起業」という働き方に焦点をあてることは、社会的に重要な意義を持つ。また、学習は社会・文化レベルのシステムの変化であり、新しい活動の創出こそ学習のエッセンスである（茂呂、2001）という状況的学習論からの指摘を考慮すると「起業」を検討することで「学習」という心理学的トピックに関する理論的なアドバンスが期待できる。

ところで、城の指摘する働き方の転換は、現代社会を覆いつくす資本主義の限界を表している点にも留意すべきだろう。資本主義の限界に伴う格差の拡大といった生き辛さや、経済成長を第一目標とする近代的な資本主義に基づく価値観を転換する必要性は、多くの論者によって指摘されている（広井、2015；水野、2014；佐伯、2015）。例えば水野は、資本主義の構造として、ウォール街や富裕層といった「中心」と発展途上国や貧困層といった「周辺」の存在を指摘し、「周辺」を広げることによって「中心」が利潤を効率よく蒐集するシステムとして資本主義を捉えた。そして、地理的・物的空間、電子的・金融的空間、両方のフロンティアの拡大の限界とともに資本主義は終焉を迎えるため、資本主義的な価値観に基づく市場経済の成長・拡大からの脱却が必要であると主張している。

これらの指摘を考慮すると、数ある職業の中でも、新たなる価値観を検討する上で示唆に富むと考えられる事業に焦点を絞り、その事業の起業につい

て検討を行うべきであろう。それでは、どのような事業を対象とすれば、資本主義の限界を乗り越えた新たな価値観を考える上での示唆が得られるだろうか。次節では、広井のポスト資本主義に関する論考を紹介しながら、新しい価値観を考えるための示唆を得るために、どのような事業に注目するべきか言及する。

なぜ福祉事業か―ポスト資本主義における価値観―

広井（2015）は、地球レベルの資源・環境的制約という「外的な限界」と、人々にある程度モノが行きわたり需要が成熟・飽和するという「内的な限界」を資本主義の限界として指摘し、今後、我々がとりうる道として、市場経済をコミュニティや自然といった土台へと着陸させる「ポスト資本主義」と、電脳世界や宇宙開発によって市場経済を無限に離陸させる「電脳・超資本主義」という２つの可能性を示した。この２つの可能性を指摘した上で、人間の経済が自然やコミュニティという有限な基盤を持っており、「電脳・超資本主義」では、それらの基盤との解離の度合いに応じて様々な格差が生じ、その結果、個人や人間にとっての土台そのものを侵食するため、前者の「ポスト資本主義」を我々が今後取るべき道であると結論付けた。そして、ポスト資本主義においては、ロボット頼りの少ない人手で多くの生産を上げる「労働生産性」が重視される価値観から、多くの人手を使いながら自然資源の消費や環境負荷は抑えるという「環境効率性」を重視する価値観へと「生産性」概念の転換が課題であると主張する。このような転換を考慮すると、従来の「労働生産性」の下では、多くの人手を必要とするため生産性が低いとされた福祉事業のような対人サービスの領域が、「環境効率性」の下では、もっとも生産性が高い領域となることを広井は指摘している。つまりは、対人サービス業、特に福祉事業に注目し、研究することは、これからの社会（広井のいうポスト資本主義）において重要な意義を持つだろう。そのため、本研究では、数ある職業の中から特に福祉事業を行っている法人を対象とする。

次節から起業に関する先行研究をレビューし、本研究がとるべき分析の観点について議論していく。

心理学における起業研究―要素還元主義の危険性―

心理学の領域、特に社会心理学やパーソナリティ心理学においては、事業が起こり、継続し、経済的に成功した起業家たちは、どのような心理学的要因を備えているかといったテーマについて、実証主義的な研究が進められてきた(Brandstätter, 2011)。

この領域を総覧した研究の一つであるBrandstätter(2011)は、1990年から2010年までに発表された起業家を対象とした論文のレビューから、Big Fiveや自己効力感といった心理学的特性と起業家的な意図や起業家の業績との間の関係性の検討に研究が集中していることを指摘している。Big Fiveについては、誠実性・開放性・外向性が起業したいといった起業家的な意図および経済的成功に代表される起業家の業績と正の相関を示し、情緒不安定性は起業家的な意図および起業家の業績ともに負の相関を示すことを多くの研究の結果から結論付けた。また、自己効力感についても多くの研究でテーマとして取り上げられており、起業やビジネスの成功において、重要な要因であると紹介した。さらに、今後の展開として、これまで取り上げられてきたBig Fiveや自己効力感をはじめとする要因間の詳細な関連について、縦断研究を用いて検討する必要があることを主張した。

Laguna(2013)は、起業家特有の自尊心と全般的自尊心が、1年後の事業の開始に影響を与えるかについて検討した。起業家育成プログラムの参加者を対象に起業家特有の自尊心、全般的自尊心や、起業したいかどうかといった起業に対する意図を測定する質問紙調査を行い、1年後の事業開始をどの程度予測するか縦断的な調査を行なった。その結果、人口動態変数といったその他の変数よりも起業に対する意図の方が１年後の事業開始をより良く予測できるとし、起業家特有の自尊心と全般的自尊心については起業に対する意図を予測する変数として重要であると結論付けた。

以上のような、要素還元主義は、様々な関係の中で行われている社会的実践の多くを捨象し、不可視にしているという問題点が経営学サイドから指摘されている（入江、2006）。入江は、エジソンの例を用いて、「エジソンが電球といった新技術を開発し、事業の立ち上げに成功した。そのためには、1日３時間しか寝なかった」というエジソンの成功を個人的な努力や性向という要素に還元した説明からは、実際にエジソンのように事業を成功させるためには、電球の開発といった「新技術開発」をし、21時間働かなければならないという抑圧的な規範しか得られないとする。かなり単純化した例ではあるが、社会的実践を捨象した要素還元主義的な研究知見が最終的に社会に送り出す言説の危険性は、十分理解可能である。本研究の問題意識は、新たな価値観や働き方の可能性の探求である。このように問題

意識の宛先が社会的な実践へ向いていることを考慮すると、入江の指摘は重要であり、要素還元主義に陥ることなく、起業という現象を捉える必要がある。

アクターネットワーク論という観点
ー新たな社会 - 技術的アレンジメントの形成としての起業ー

では、起業プロセスを起業家個人のもつ要素に還元する心理学的研究を乗り越えるためにどのような視点があるだろうか。本節では、アクターネットワーク論に基づく起業研究のレビューを通して、本研究における分析の観点について議論する。アクターネットワーク論は、人間・人工物・制度・生命といったモノすべてにアクターとしてネットワークにおける役割を与え、具体的な行為を可能にする能力であるエージェンシーと、それらの布置である社会 - 技術的アレンジメントを二分せず、相互に形成しあうものとして捉えるといった理論的な特徴を持つ（上野・土橋、2006）。

松嶋（2006）は、起業家は既存の均衡を変更する特別な存在であり、自らがおかれた状況への鋭い洞察力を持ち、それらの心理的動機や行動特性を持った起業家によって計画通りイノベーションが進行するといったナイーブな通説に対して、アクターネットワーク論から問い直しを図った。具体的には、健康食品開発を手掛けるベンチャー企業を起業したK氏の事例をもとに、起業プロセスを様々な利害関係の間で行われるアクターの取り込みあいである「関心の翻訳」という観点から検討した。このような事例の検討から以下のことが明らかになった。①K氏が、医師から創業者へ転身したのは、K氏に特別な心理的動機が内在していたためではなく、JICAでの医療ボランティアや様々な医療プロジェクトでの出会いといった先行する「異種混合のネットワーク」から生じた結果であること。②医療業界においては先端的なコア技術が食品業界に持ち込まれることで様々なアクターの登場とともに解体・再構成されたということ。③コア技術の解体・再構成をはじめとする翻訳戦略の下で、あらかじめ用意された事業構想の成否というよりかは、事業構想そのものも再構成されるという起業プロセスを経たこと。このように、アクターネットワーク論に基づき、様々な関係との「関心の翻訳」を行う中で、先端的なコア技術や事業構想が力動的に揺れ動く様子を記述したという点において、松嶋の研究は意義を持つだろう。

また、アクターネットワーク論に依拠しながら、起業プロセスを検討した研究は海外においても行なわれている。Roscoe, Cruz, & Howorth(2013)は、起業研究における中心的な概念である機会（opportunity）が、物質性に埋め込まれた概念であることをホンジュラスの大規模農業法人の事例の検討を元に主張した。Roscoeらは、起業家個人とは独立して存在する機会を起業家が発見しているという前提を持つ「機会発見型」の研究を批判し、農業法人に関わる人々の口述史の分析を通して、ホンジュラスの気候や輸出入制度、栽培する野菜といった物質に埋め込まれた機会とそれらへ働きかける起業家の相互補完的な関係を記述した。つまり、起業家が、働きかけることで初めて機会は機会として立ち現われ、そして機会への働きかけを行なうことを通して、初めて起業家も起業家として立ち現われる。

以上のようなアクターネットワーク論の観点から見れば、技術的・政治的・経済的な利害関係の中で、制度や人物、気候、動物種といった起業家を含めた様々なアクター同士が相互作用しながら、新たな社会 - 技術的アレンジメントを形成し、同時に起業家を含めたアクターの新たなエージェンシーを形成するプロセスとして起業は捉えられる。このような観点に依拠すれば、従来の心理学的起業研究を乗り越え、実際の社会の中で豊かな動きを見せる起業プロセスを捉えることが出来るだろう。ところで、アクターネットワーク論で主に焦点が当てられてきた技術的・政治的・経済的な利害関係だけではなく、より多様な関係を人々のつながりは含んでいるという指摘がなされている(上野・ソーヤー・茂呂、2014)。次節では、上野らを紹介しながら、従来のアクターネットワーク論に依拠した研究において不足している点を指摘する。

アクターネットワーク論における「交換形態」という新たな次元

上野・ソーヤー・茂呂（2014）は、ラトゥールをはじめとするアクターネットワーク論が取り扱った事例は、政治的・経済的利害に関連するものが多く、政治的・経済的な同盟関係の中で初めて、人工物や技術は同盟を形成するアクターまたは敵対するアクターになるという政治的・経済的な次元にしか焦点を当てていないという限界を指摘した。そのような限界を乗り越え、従来のアクターネットワーク論とは異なる新しい観点を提供するために、人々の「交換形態」という別の次元に焦点を当て小学校における文楽を題材にした総合学習の事例を検討した。そこでは、プロの文楽演者・街の再興を狙う

表1　各法人のプロフィール

法人名	事業内容	設立年	事業所の所在地
特定非営利活動法人　静岡福祉総合支援の会　空と大地と	・就労継続支援(B型)事業 ・生活介護事業 ・就労移行支援事業 ・グループホーム・ケアホーム　しおさい ・障害者雇用企業内サポーター育成事業(静岡県委託事業) ・障害者ジョブコーディネーター養成事業(静岡県委託事業) ・生活相談	2004年	静岡県焼津市
特定非営利活動法人　ぷらちなくらぶ	・居宅介護支援事業所［ぷらちなぷらん］ ・訪問介護・自立支援 ・小規模多機能ホーム［スマイルぷらちな］ ・ぷらちな児童デイ［児童デイサービス］ ・子育て支援（子育てサロン＆一時預かり・子育て応援隊） ・新田キッズルーム［新田キッズルーム、幼稚園送迎ステーション］ ・ギャラクシティ、ちびっこガーデン	2001年	東京都足立区
一般社団法人　アイネット	・厚生労働省認定 『地域若者サポートステーション事業いばらき県西若者サポートステーション運営 ・茨城県・市町村委託青少年自立支援事業 ・生活困窮者の支援活動 ・青少年のいろいろな問題の相談、助言情報提供 ・仕事トレーニングプログラムの実施 ・講演会、講座、イベント等の企画 ・不登校・ひきこもりの仲間が集まるコミュニティ「笑える不登校倶楽部」運営	2013年	茨城県筑西市

NPO・近隣住民といった様々なグループが関わり、活動の物質的リソース・非物質的知識・技能・ボランティア的な仕事を贈与する一方、地元との一体感・所属感・アイデンティティの感覚などを返礼として受け取る「感情の交換」を行なっていた。また、小学校という制度を超えて地域や文楽コミュニティとつながりながら文楽に関する知識や技術をめぐる新しい社会‐技術的アレンジメントが形成され、その中で、「文楽を地域の共有の文化財として残したい、また、そのようなものとして文楽を学習したい」といった学習に関する新たなエージェンシーが形成された。このような事例から、上野らは、「学習をめぐる社会‐技術的アレンジメントの形成とは、人々の間の物質的リソース・非物質的知識・技能・仕事についての新しい交換形態を作り出すこと」として表現可能であると主張した。

このような上野らの主張を考慮すると、松嶋やRoscoeらのアクターネットワーク論に基づいた起業研究も技術的・政治的・経済的な側面しかとらえていないという点で不足している。特に、ケアの本質的な要素の1つとして「情動に関するコミュニケーション（広井、1997）」が指摘されており、福祉事業を対象とする本研究にとっては、上野らの指摘する「交換形態」という視点を取り入れ、検討する必要があるだろう。また、福祉事業を対象とすることで、上野らの取り扱った事例以上に情動面での人々やコミュニティ同士のつながりの記述が期待できるだろう。

以上から、本研究は、終身雇用制といった従来の働き方やそれを取り巻く資本主義に基づく「労働生産性」を重視する価値観が転換しつつある時代背景に着目し、福祉事業の起業プロセスについて検討する。そのための分析の観点として、起業を起業家個人の内的な心理特性に還元することなく、様々なアクターの間で揺れ動く起業プロセスの記述が可能なアクターネットワーク論を採用する。具体的には、福祉事業を行なっている法人の関係者を対象にインタビューを行ない、事業を立ち上げるにあたって、どのような関係者とどのように繋がりながら、新しい社会‐技術的アレンジメントを作り上げているかという観点から起業プロセスを記述する。なお、記述する際、上野らの指摘に留意し、従来のアクターネットワーク論が主に焦点を当てていた技術的・政治的・経済的な利害関係だけでなく、情動を含む幅広い人々・制度・モノの間の交換に着目して記述する。しかし、一口に法人の関係者と言えども、法人設立のために尽力した中心的なメンバーから近隣住民まで、様々な関係者が想定可能である。そこで本研究では、特に法人の事業立ち上げに関わった中心的なメンバーであり、現在も法人に勤務する人物を対象に調査を行ない、どのような社会‐技術的アレンジメントが新たに形成されたか記述する。

２．方法

データ収集及び分析方法：半構造化面接を用いてデータを収集した。M-GTAを用いて分析中である。

対象者：東京都内、静岡県内、茨城県内で福祉事業を行なっているNPO法人の立ち上げに関わったメンバー。東京都内のNPO法人については理事長、副理事長、事業開始初期から勤務する職員の計3名、静岡県内のNPO法人については理事長、副理事長、施設長の計３名、茨城県内の一般社団法人については、理事長1名にインタビューを実施した。各法人のプロフィールについては、表１に、各インタビュイーのプロフィールについては表２にそれぞれ示す。なお、インタビュイーの希望により、法人名、個人名を公表

表2 各インタビュイーのプロフィール

名前	所属団体	役職	メモ
大橋妙子	空と大地と	理事長	
小倉雅人	空と大地と	副理事長	(株)空と大地と 代表取締役兼任
	空と大地と	施設長 サービス管理責任者	
大竹恵美子	ぷらちなくらぶ	理事長	
団野純子	ぷらちなくらぶ	副理事長	
井上美保	ぷらちなくらぶ		
浅沼秀司	アイネット	理事長	

する。

主な質問項目：質問項目として、「法人として、行なっている事業について、どのような思いやこだわりをもっているか」「法人(事業)を立ち上げるにあたって、どのような点に苦労や、やりがいを感じたか」「どのような関係者とどのように関わりながら、事業を立ち上げたか。また、行なっているか」といった法人の事業についてや、その際の関係者などに関する項目を事前に準備した。また、面接状況に応じて適宜、各質問の内容について掘り下げるため、追加の質問や質問の変更などを行なった。

３．結果と考察

分析テーマ：福祉事業に携わる法人の事業立ち上げにおける新たな社会 - 技術的アレンジメントの形成プロセス

分析焦点者： 法人の事業立ち上げにかかわり、現在もその法人で勤務している人々

NPO法人「空と大地と」の大橋妙子氏、小倉雅人氏のインタビューデータについて、オープンコーディングを行なった結果の一部について本論では報告する。

施設へ向けられる住民感情と新たな名付けの創発（表３）

必要だが近くには欲しくないという【施設に対する矛盾した住民感情】を「ごみ焼却所」に例え、その中で、障がい者への差別や自分たちの組織への「宗教団体じゃないか」との噂といった【情動的な痛み】を受ける。それに対抗するように「自分たちはクリーンでクリアな組織を作る」という【活動における信念】を持ち続けた。また、それらの噂への対処として施設の【一般公開という対応策】を取る中で、重度の知的障がいを持つ「異様な」風貌の大人たちと子どもたちが交流することで、気持ちの悪い障がい者という障がい者類型から「けんちゃん」という名前を持った個人として認識する【交流から生まれる新たな名付け】が創出された。この子ども達による新たな名付けの創出は、大橋氏のやりたいことの【軸となる経験】として語られていた。

表3　施設へ向けられる住民感情と新たな名付けの創発に関するカテゴリと該当する語り

カテゴリ名	具体的な切片
【施設に対する矛盾した住民感情】	小倉：ごみ焼却場みたいなもんだよね。なきゃこまるけども。自分の近くにはほしくないっていう。
【活動における信念】	大橋：そう。だからあんなところがとか、噂とかもいっぱいたっちゃって。まぁでも一貫して私が思ってたのは、やってることは間違いない。私はクリーンでクリアなものをやり続けるっていう思いがあったので、で、
【情動的な痛み】	大橋：特にこの地域は、志太・榛原地域っていうのは、静岡県内でも遅れていると言われる結構差別、偏見とかっていうのが多い地域なんです。なので、障がい者とかっていうとね。ほんとにね。変な目で見られる。
	大橋：そう。だからあんなところがとか、噂とかもいっぱいたっちゃって。まぁでも一貫して私が思ってたのは、やってることは間違いない。私はクリーンでクリアなものをやり続けるっていう思いがあったので、で、
	大橋：でも若い子たちが出入りしたら噂になってなんか宗教団体じゃないかって噂になって、すぐにここを一般公開したり、もう誰でも入ってくださいって公開したり、私が、地域の人たちのそういう行事にずっと出て、川ざらいから、あっちからこっちから、先に一人でここに住んで、私はそういう行事に全部出たです。それが、コミュニティにつながる、その地域につながるっていうことをしなきゃいけないので。そうだったよね。役員やらされて。
【一般公開という対応策】	大橋：でも若い子たちが出入りしたら噂になってなんか宗教団体じゃないかって噂になって、すぐにここを一般公開したり、もう誰でも入ってくださいって公開したり、私が、地域の人たちのそういう行事にずっと出て、川ざらいから、あっちからこっちから、先に一人でここに住んで、私はそういう行事に全部出たです。それが、コミュニティにつながる、その地域につながるっていうことをしなきゃいけないので。そうだったよね。役員やらされて。
【交流から生まれる新たな名付け】	大橋：それをこうはじめ近所の子たちが、見に来るですよ。小学生とか幼稚園の子たちとかね。面白いものがいるって、あのある種動物園のように。うんで。学校は午前中に終わるから、午後からこの辺遊びながら、それで私は事業開いてから、もう公開、玄関あけてあるので。いいよいらっしゃいいらっしゃいって。子どもたちも一緒におやつ食べたりとかね。そうするとねぇ。この異様な大人がね。知的障がいの異様な大人がぼとぼとこぼしたり、お茶飲めなくってひっくり返したり、いろんなことするんだよね。そういうことを気持ち悪いって顔で見てるんだよね。でもそれがずっと回を重ねてくるとその子たちが、こぼしたからって拾ってあげたり。で、えっと。名前を憶えてけんちゃんって呼んだり。仲良くなってくるんですよ。それで、何が起こるかって、散歩に出た時にその子なんか、30メートルもあるくもやっとこさっとこのね。体こんなで、足こんなの歩いたこともない。家で垂れ流し状態の子、方だったので、年齢は30超えてましたけど。うん。それで、散歩に行ったときに中学生が歩いてきてね。何だこいつ気持ち悪いって言ったですよ。それでここに来ていた男の子たちとか女の子たちとかまぁ何人かいたんだけど。その子たちが前にいってね。こいつじゃないもんけんちゃんだもんって。この子、けんちゃんだもんって教えたですよ。泣けましたね。それはね。
【軸となる経験】	大橋：だから、ずっと気持ち悪いとかって見てた子たちが、そうやって前に立ってこいつじゃないもん、けんちゃんだもんって言ってくれるそれを私はなんかいまだになんかそれが自分の中に軸がありますよね。私が作りたいのは、こういうことなんだと思います。

このように、起業プロセスとは、新参者である自分たちへ向けられる既存のコミュニティ（この事例では地域住民）からの情動的なまなざしと相互作用するプロセスであると言える。このような相互作用の中から、障がい者という固定化した類型から、「けんちゃん」という交流を元にした彼ら独特の類型が生じたことは、新たな社会 - 技術的アレンジメントが形成された１つの事例として解釈可能であろう。また、子ども達が開放された空間の中で、勝手に障がい者類型を崩し、新しい類型を大橋氏にギブしたという解釈も可能であり、交換形態に基づく考察も有望であると考えられる。このような、「創発したもの」が新たな社会 - 技術的アレンジメント（交換形態）の形成プロセスにどのように位置づくか今後詳細な分析を通して検討する必要がある。

施設設立に関する理解の要請―提供と巻き込み―（表４）

また、大橋氏らは、単純に事業を起こす以上に地域住民に自分たちの活動や障がい者への【理解の要請】を重要視している。このような【理解の要請】を子細に見ていくと、２つのカテゴリが立ち現われてくる。まずは、川ざらい、林の掃除、町づくり委員といったコミュニティにおける役割を引き受け、地域の広報や話し合いのために機器や場所を提供し、自分たちの活動について理解を求めるとともに自分たちの活動に多少のことでは文句を言えない状況を作り上げるという【リソースの提供による理解の要請】であり、上野らが指摘する〈感情の交換（贈与と返礼）〉という交換形態の1つとして解釈可能である。このような〈贈与と返礼〉という交換形態の形成は、地域における自分たちの立ち位置を確固たるものとして社会 - 技術的アレンジメントを新たに再構成したプロセスとして考えられるだろう。

もう一つは、地域住民を巻き込んだ飲み会を開催し、地域住民との交流の中で自分たちへの理解を求める【巻き込みによる理解の要請】というものである。【リソースの提供による理解の要請】のような「贈与と返礼」ではない、大橋氏の能動的な動きとそれに対する地域住民の応答といった彼らの間で行われた相互作用は新たな交換形態を検討する上で、注目すべきであろう。このような【巻き込みによる理解の要請】が、大橋氏を含めた社会 - 技術的アレンジメントの新たな形成プロセスにどのように位置づくか、さらなる検討が必要である。

表4　施設設立に関する理解の要請に関するカテゴリおよび切片例

カテゴリ名	具体的な切片
【理解の要請】	大橋：…みんなやりたくないんですよ。コミュニティの役員。で、もう、あんたしかいないからやって頂戴っていわれて。私はその二つ返事でその人の嫌がることを率先して、やって、で、私はそこで理解を求めたというか。川ざらいとか普通は男性しか出ないので。私は一人もんじゃんね。離婚しているので。なので、川ざらいに出て、で、その、入って、それで男衆、この地域の30何軒の男衆と一緒に川さらいながら、休憩の時間にチャンスと思って、私こういうことしたいだよってお話するわけですよ。
	大橋：で、片方でこの地域の中で皆様にわかってもらわないといけないので、そういうあれに出て、それでこういうことしたいあぁゆうこうとしたいっていって。まぁお前変わったことしたいんだなっていわれながら、でもねぇ別にそれならなんか自分たちでいろんなことやってえらいなとかってみんながその関わりの中で、もちろんここで宴会やったりとか。
【リソースの提供による理解の要請】	小倉：町づくり委員。大橋：町づくり委員。北本：ほう。大橋：っていうのをみんなやりたくないんですよ。コミュニティの役員。で、もう、あんたしかいないからやって頂戴っていわれて。私はその二つ返事でその人の嫌がることを率先して、やって、で、私はそこで理解を求めたというか。川ざらいとか普通は男性しか出ないので。私は一人もんじゃんね。離婚しているので。なので、川ざらいに出て、で、その、入って、それで男衆、この地域の30何軒の男衆と一緒に川さらいながら、休憩の時間にチャンスと思って、私こういうことしたいだよってお話するわけですよ。
	小倉：町おこしの何かみたいなところで。だからいろんな資料を作ったりとか、その発表に向けてとか、なんかあって言うときにたまたま役員みたいなものをやってて。たまたまパソコン打てる人が、なんか印刷機がないとか、なんかそんな感じで重宝されたんだよね。また。大橋：あぁそうなんかその。うんと。地域の中で。文章作れる人はいないは、パソコンやれる人はいないわで。たまたま私たちはそういうものを持っていたので、で、で。それでみんながくっと入ってきたんだよね。それで公会堂とかもこの地域にはなかったので、ここを使ってくれていいよみたいに開放してるからどうぞみたいなことを言ったりして。なんせ。皆さんが、けっこう入って、フレンドリーに入ってくれて。まぁそれだけのことを私たちはさしてもらったんですけど。
【巻き込みによる理解の要請】	大橋：で、片方でこの地域の中で皆様にわかってもらわないといけないので、そういうあれに出て、それでこういうことしたいあぁゆうこうとしたいっていって。まぁお前変わったことしたいんだなっていわれながら、でもねぇ別にそれならなんか自分たちでいろんなことやってえらいなとかってみんながその関わりの中で、もちろんここで宴会やったりとか。
	大橋：そう。人呼んで。だから飲もうよとか言って。呼んだりしながら。そうやって地域の中に入っていって、障がい理解も一緒にもらって。なのであの時がもしかしたらエネルギーが一番あったかもしれない。そういうことしなきゃって理解をもらわなきゃっていうのがあったんでね。そんな感じ。だったね。最初はね。今振り返ってもよくあんなことしたなって思うくらいにね。その川ざらいやったりゴミ拾いやったりね。はい。そこかなまずその。ねぇ最初の所の関わりが。

コミュニティにおける最周辺参加者の存在(表５)

さて、これまでは、施設近隣に住む地域住民といった、本事例の法人の直接的な利害関係者との社会‐技術的アレンジメントの形成プロセスについて言及してきた。しかし、本事例では、そのような直接的な利害関係者だけではない、より幅広い関係者の存在を指摘できる。

例えば、当該施設では、東日本大震災の避難の際、通常時ではその関係性が可視化されないような【最周辺参加者】から避難の補助を受けている。この【最周辺参加者】は、「いつも、車で施設の前を通っている」という程度の関係であり、通常では可視化されないが、震災という非常時において初めて可視化される。このような【最周辺参加者】の存在について、避難の補助だけでなく「ほんとにまず気持ちがうれしかった」といった【感情贈与に対する喜び】や、そういった補助や感情贈与に対して、「ありがたい」といったような【最周辺参加者への謝恩感】を大橋氏は語っており、【最周辺参加者】との感情の交換が行なわれていたと解釈可能である。また、「あれ以来一度もほんとに会うこと」もなく、「名乗ってはくれない」といった【匿名性という最周辺参加者の特徴】も語られていた。このような匿名性のため、直接的に何かを返礼するのではなく、【「忘れない」という感情返礼】といった独特な返礼を大橋氏は行なっていた。こういった【最周辺参加者】を含めた地域コミュニティに根差すことは職員や利用者に【ネットワークを通した成長としての学習】をもたらす一方、南海トラフ地震に伴う大津波への対策のための施設移転が出来ないといった【地域コミュニティに根差した施設閉鎖の困難】も、もたらしており、コミュニティに根差した運営におけるアンビバレントな側面も指摘可能であろう。

表５ コミュニティにおける最周辺参加者の存在

カテゴリ名	具体的な切片
【最周辺参加者】	大橋:それでも私たちは声掛けしてって思って、戸締りをしていたらあの高齢のおじいさん、ご夫婦が来てくれて、で確かいつもここ車で通っていて。ここが福祉施設だって思っていて、で、避難に困っているだろうと思って、自分たちは途中で車を乗り捨てて、ここに来て下さったんです。助けに。北本:全然見ず知らずの人がですか。大橋:そう。うん。で私は、あの迷っちゃったんだと思ったの。あんまりご高齢だったもんだから。迷っちゃったんだと思って。いいからいいから一緒に逃げていこうって。このうちの車にのってとかいって。言ってたら。いや違うよって私たちは助けに来たんだよって言われて。あぁねぇありがたいなって。そのコミュニティがつながっている事のありがたさ。そこがいつも通っていたら、ここにねそういう子がいた。ラジオ体操をしてた。外で、だから何とかこの子たちを助けてあげなきゃいけないと言ってもらったときには、すごいありがたかったし、近所のおじいちゃんとかおばあちゃんとかをのっけて私たちは避難したんですけれども。
【感情贈与に対する喜び】	大橋:あの時に助けていただいてね。ほんとに気持ちがまずうれしかったって。自分たちで、海に近づいてくるなんてそんなね。それもご高齢の方がね。ありえないじゃない。それを全部おいてでも車乗り捨ててでも来て下さった、っていう思い、は私は本当にうれしかったですって
【最周辺参加者への謝恩感】	大橋:あぁねぇありがたいなって。そのコミュニティがつながっている事のありがたさ。そこが《施設の前の道路を》いつも通っていたら、ここにねそういう子がいた。ラジオ体操をしてた。外で、だから何とかこの子たちを助けてあげなきゃいけないと言ってもらったときには、すごいありがたかったし、
【匿名性という最周辺参加者の特徴】	大橋:それでご自分で名乗ってはくれないけれど私たちは、お祭りの時、ここ《施設》でお祭りをやるんですけど、300人くらいみなさん来てくれるですけど。こんなとこにね。その中にいらっしゃるのかもしれないけれど、分からないですよ。何も名乗らずに分からずに、なっていますけれども。
【「忘れない」という感情返礼】	大橋:えっとどこのどなたかわかりませんけれども、ほんとにあれ以来一度もほんとに会うこともない、お目にかからないしね。でもほんとに私は、忘れませんって《地域の広報誌に》コメント出させてもらったんだけどね。
【ネットワークを通した成長としての学習】	大橋:うん。《地域とのつながりを》津波に流されるわけにはいかないんですね。うん。だからそんなこともここのあれかね。ここの地域の方たちの、ありがたさなのかね。そのあの何だろうね。一つの障がい者の施設っていうそこから始まる、皆さんのからみ、からみがね。ここまで私たちを育ててくれているし、この子たちもそういう意味ではそうだったし。だから、それを学習といえば学習というんですかね？そういうことなんですよね？
【地域コミュニティに根差した施設閉鎖の困難】	大橋:そのなんかそういうことを含めてこの地域の人たちに支えてもらっているっていう思いは私の根源にあって。それがじゃあ全部移転って、もちろんここ、移転するにはお金かかるし、お金ないから移転できないんですけど、でもあの安全を重視したいんだけどもこの地域の方に支えてもらって、築いた今までのことはね、そうそう簡単に水には流せないというか。北本:そうですね。大橋:うん。津波に流されるわけにはいかないんですね。うん。だからそんなこともここのあれかね。ここの地域の方たちの、ありがたさなのかね。
【物理的距離が作る最周辺参加】	大橋:実はな、妙子って、こういうところと交流している、僕はそこにボランティアに行ってるんだよって。銀行員を長いことやって、それで、定年退職をして、娘さんがちょっと精神を患っていたので、一緒に沖縄に移り住んでいたの。で10何年いたんですよね。それでまた、千葉の人でね。それこそ千葉に帰ってきたんですけど。で、そのその時に、ここがねすごくいいとこでねって言って。で、だからこっち来たら私の所のボランティアやってあげるよって言ってたんだけど。千葉にすんじゃったんで。やってもらえなくなっちゃったんだね。それで知り合ったの。だから橋渡しはそのさっちゃんの弟がしてくれたんです。
【形式的手続きによる県外施設とのつながりの可視化】	大橋:はい。それもそこで、あの、提携書はどこにあるの？もうここにある？島田《の施設》にあるのか。小倉:もう向こうもってったの。大橋:向こうもってっちゃったと思うよ。島田にね。私たち姉妹都市提携、姉妹施設提携をしたんです。兄弟の契りを、ははは。で、おかしいね。そう。あの契りをしたですよ。それもねあってね。そういう、なんかね。別にそんな約束を交わさなくてもいいんだけど。でも、形だからしましょうって言って、それで、縁組をしたんだよね。姉妹施設の縁組。縁組です、縁組。
【物理的距離がもたらす安心感】	小倉:一つはね地震の災害があったら、というとことか。北本:なるほど。大橋:安心材料になる。こういうことを人はしたがるんだよね。ね。結局、なんかの証明なんだと思うんだけど。でも、これをねやったことでみんなで、なんかすごい喜んだよね。安心もらえたとかね。静岡で災害があった時にいつでも助けにくるよとかってね。できればうち。沖縄引っ越してらっしゃいみたいな。で、逆に、その逆もありだよって、台風が沖縄に来たって言えば、大丈夫ですかってメールを送って。で、静岡に上陸だよって時は向こうから生きているかいってメールが来たりとかそんなことの日々をみんなで分かち合っているみたいな。

《 》内は著者注

こうした、匿名性を持ち、通常時においては可視化されないつながりを持つ地域住民といった【最周辺参加者】だけでなく、遠方に在住する古くからの知人とのつながりといった【物理的距離が作る最周辺参加】についても語られていた。そして、このような物理的に距離があるつながりの1つとして県外福祉施設とのつながりが語られていた。そのつながりにおいては、姉妹縁組の書類を取り交わす【形式的手続きによる県外施設とのつながりの可視化】によって、自然災害の発生時に相互に助け合うといった【物理的距離がもたらす安心感】が生成されていた。こういった安心感は物理的距離があるからこそ生じるものであり、匿名性や非常時に可視化されるといった特徴以外の最周辺参加者の特徴として、物理的距離という視点も指摘できる。

以上のような【最周辺参加者】のような、物理的に距離があり、匿名で通常時ではそのつながりが可視化されないといった関係者との感情の交換を見ることで、水野や広井が指摘する資本主義の限界を乗り越えたオルタナティブを考える上で示唆を得られるだろう。というのも、【感情贈与に対する喜び】への【「忘れない」という感情返礼】といったように匿名性という特徴に起因する独特の交換形態は、水野が指摘した中心による周辺からの利益の蒐集といった資本主義システムには乗らない新たな関係性を考える上で示唆を持つだろう。

また、広井のポスト資本主義論では、自然やコミュニティに根差した市場経済が必要であると指摘している。本事例においては、コミュニティに根差すことのアンビバレントな側面、自然災害といった自然との交通において人々が物理的距離のある施設とつながりを持つことで安心感を得ていること、また東日本大震災を契機に日常では可視化されない【最周辺参加者】とのつながりを見出しているといったことが明らかになった。このような知見は、ポスト資本主義が目指す、自然やコミュニティに着陸した市場経済のあり方を考える上で、一定の示唆を持つだろう。

先述の通り、本論では分析途中の結果を報告した。これまでのオープンコーディングの結果を基に他の事例を含めて、まとめたものについて発表時には議論したいと考えている。

４．参考文献

[1] Brandstätter, H. (2011). "Personality aspects of entrepreneurship: A look at five meta-analyses." *Personality and individual differences*, 51, 222-230.

[2] Engeström, Y. (1987). *learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orieta-Konsultit.
（エンゲストロム, Y. 山住勝弘・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井義信・手取義宏・高橋　登（訳）(1999). 拡張による学習―活動理論からのアプローチ―　新曜社）

[3] 広井良典(1997).　ケアを問い直す―〈深層の時間〉と高齢化社会―　ちくま新書

[4] 広井良典(2015).　ポスト資本主義―科学・人間・社会の未来―　岩波新書

[5] 入江信一郎(2006). "アクターネットワーク論に基づいたイノベーションの記述"　上野直樹・土橋臣吾（編）　科学技術実践のフィールドワーク―ハイブリッドのデザイン―　pp.128-151　せりか書房

[6] 城　繁幸(2006).　若者はなぜ 3 年で辞めるのか？―年功序列が奪う日本の未来―　光文社新書

[7] Laguna, M. (2013). "Self-efficacy, self-esteem, and entrepreneurship among the unemployed." *Journal of Applied Social Psychology*, *43*, 253-262.

[8] 松嶋　登(2006). "企業家による翻訳戦略―アクターネットワーク理論における翻訳概念の拡張―"　上野直樹・土橋臣吾（編）　科学技術実践のフィールドワーク―ハイブリッドのデザイン―　pp.110-127　せりか書房

[9] 水野和夫(2014). 資本主義の終焉と歴史の危機　集英社新書

[10] 茂呂雄二(2001).　"実践とエスノグラフィの意味"　茂呂雄二(編著)　実践のエスノグラフィ　pp.1-19　金子書房

[11] Roscoe, P., Cruz, D. A., & Howorth, C. (2013). "How does an old firm learn new tricks? A material account of entrepreneurial opportunity." *Business History*, *55*, 53-72.

[12] 佐伯啓思(2015). さらば、資本主義　新潮新書

[13] 高橋勅徳(2008).　企業家の社会的構成―企業を介した組織／集団の再生産と起業家精神―　滋賀大学経済学部研究叢書, *45*.

[14] 鶴岡ナリワイ女性プロジェクトチーム(2015).　実践コース「鶴岡ナリワイ女性実践道場」コンセプト・事業紹介 2016 年 5 月 16 日〈http://tsuruoka-nariwai.com/%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%BB%E3%83%97%E3%83%88%E3%83%BB%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E7%B4%B9%E4%BB%8B/〉(閲覧日 2016 年 4 月 26 日)

[15] 筑波大学国際産学連携本部(2016).　筑波大学発ベンチャー　2016 年 5 月 16 日〈http://www.sanrenhonbu.tsukuba.ac.jp/spin_offs/〉（閲覧日 2016 年 4 月 26 日）

[16] 上野直樹・土橋臣吾（編著）(2006).　科学技術実践のフィールドワーク―ハイブリッドのデザイン―　せりか書房

[17] 上野直樹・ソーヤーりえこ・茂呂雄二(2014). "社会 - 技術的アレンジメントの再構築としての人工物のデザイン" 認知科学, *21*, 173-186.